

第2章 長目塚古墳にかんする過去の調査と成果

第1節 1949・1950年の調査（熊本県による発掘調査）

1 調査に至る経緯と経過

長目塚古墳は、熊本県阿蘇市一の宮町中通 1202-1 に所在する。それは阿蘇谷北東部に営まれた中通古墳群の主墳をなす前方後円墳である（図 17）。中通古墳群は、北外輪山から南へのびる象ヶ鼻のすぐ南側の平地部に位置し、そこは北流する東岳川沿いに形成された扇状地の北端にあたる。象ヶ鼻の最南端には、京都の嵐山になぞらえて小嵐山^{しょうらんざん}と名付けられた小高い丘があり、その上からは水田のなかに点在する古墳の姿を一望することができる（図版 14-1）。

前章でも触れたように、中通古墳群にはかつて少なくとも 14 基の古墳が分布したことを確認できるが、現在その墳丘を残すのは 10 基である（図 17）。それらのうち東岳川の西側に所在するのは 5 基で、そのなかでもっとも東岳川に近い位置にあるのが長目塚古墳である。

長目塚古墳は主軸を東西にとり、その前方部を東に向ける。かつて東岳川は、そうした長目塚古墳の前方部をまわりこむように大きくその流れを東側に屈曲させていた（図版 1・2-1）。長目塚古墳の発掘調査報告書〔坂本 1962〕によれば、1947 年（昭和 22）7 月の豪雨によって東岳川が氾濫、さらに翌年 7 月の豪雨の際にも東岳川の流れは堤防を越え、また数箇所の堤防決壊を引き起こして周囲の水田が流出し、下西河原集落を危機にさらしたという。その翌年の 1949 年（昭和 24）の出水では、長目塚古墳前方部の南側でほぼ直角に曲がる流路のため火山灰がせき止められて堆積し、川床が集落よりも高くなった。そのため、ふたたび豪雨に見舞われると東岳川は容易に氾濫し、周囲の集落や水田は壊滅的な被害を受けることが予想された。こうした点を考慮し、熊本県河港課は、長目塚古墳の前方部を横切るかたちで流路を付け替えるという東岳川の抜本的な改修工事を計画、決定した。このあたりの事情については、本書第 3 部第 1 章の緒方論文に詳しいのでぜひ参照していただきたいが、工事によって破壊されることになった長目塚古墳前方部に対する発掘調査が、熊本県史蹟名勝天然記念物並に国宝重要美術調査員であった坂本経堯を調査責任者として、1949 年（昭和 24）12 月 18 日から 28 日までの 11 日間でまず実施された。そして翌 1950 年（昭和 25）1 月以降は河川改修工事に並行して調査が進められ、同年 8 月の周辺調査をもってすべての現地調査が終了した。発掘調査の報告は、12 年後の 1962 年（昭和 37）、『熊本県文化財調査報告』第 3 集のなかの第 1 章にまとめられた〔坂本 1962、以下の本文中では 1962 報告と記述〕。

2 調査の成果および若干の検討

（1）墳丘の構造

全体形状 長目塚古墳は前方部を東に向ける前方後円墳で、その主軸方向はほぼ東西である（図 23）。規模は、墳長現存 111.5m、後円部径（南北方向）59.5m、高さ 9.2m、前方部長現存 52m、幅約 30m、高さ約 4m、クビレ部幅約 17m、高さ 1.8m である。「復原すれば前方部は約五米延長して五七米とな」るとの記述〔坂本 1962 : p. 6〕にしたがえば、墳長は 116.5m 程度になる可能性がある。前方部がきわめて低平で細長い、いわゆる柄鏡式の前方向後円墳である（図版 4・5）。本来、周溝と外堤が存在したがほとんど失われており、それらはわずかに後円部北西側とクビレ部北側に残存するのみであること、しかし周溝が墳丘の南側にも存在し

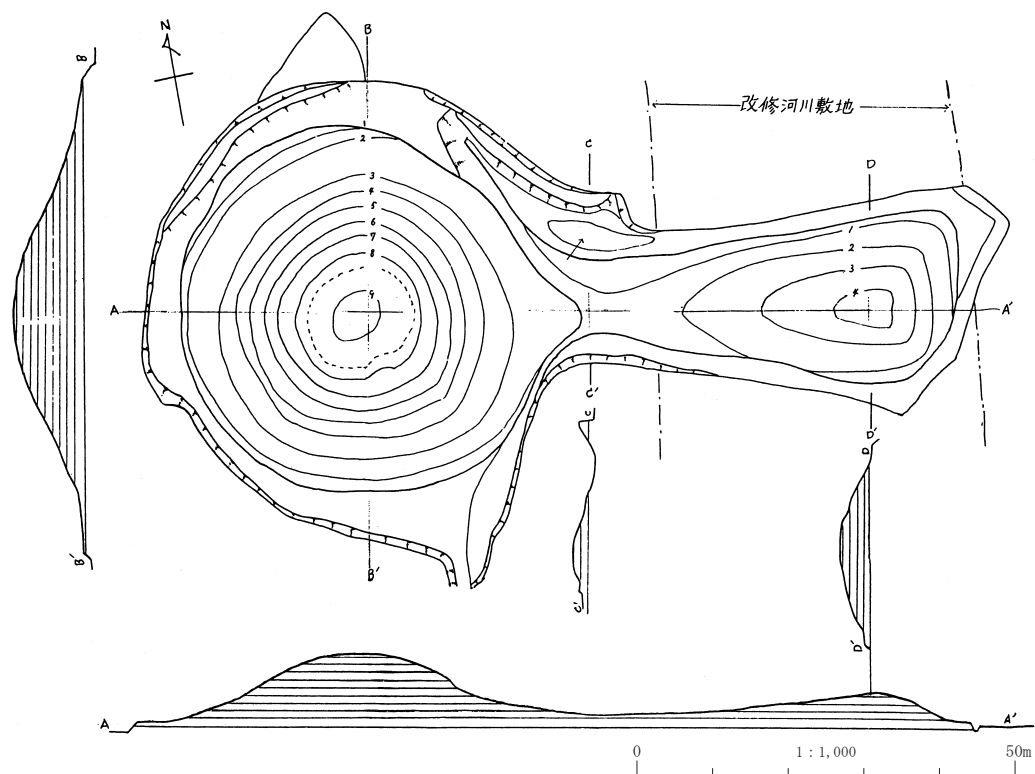


図 23 1962 報告掲載の長目塚古墳墳丘測量図

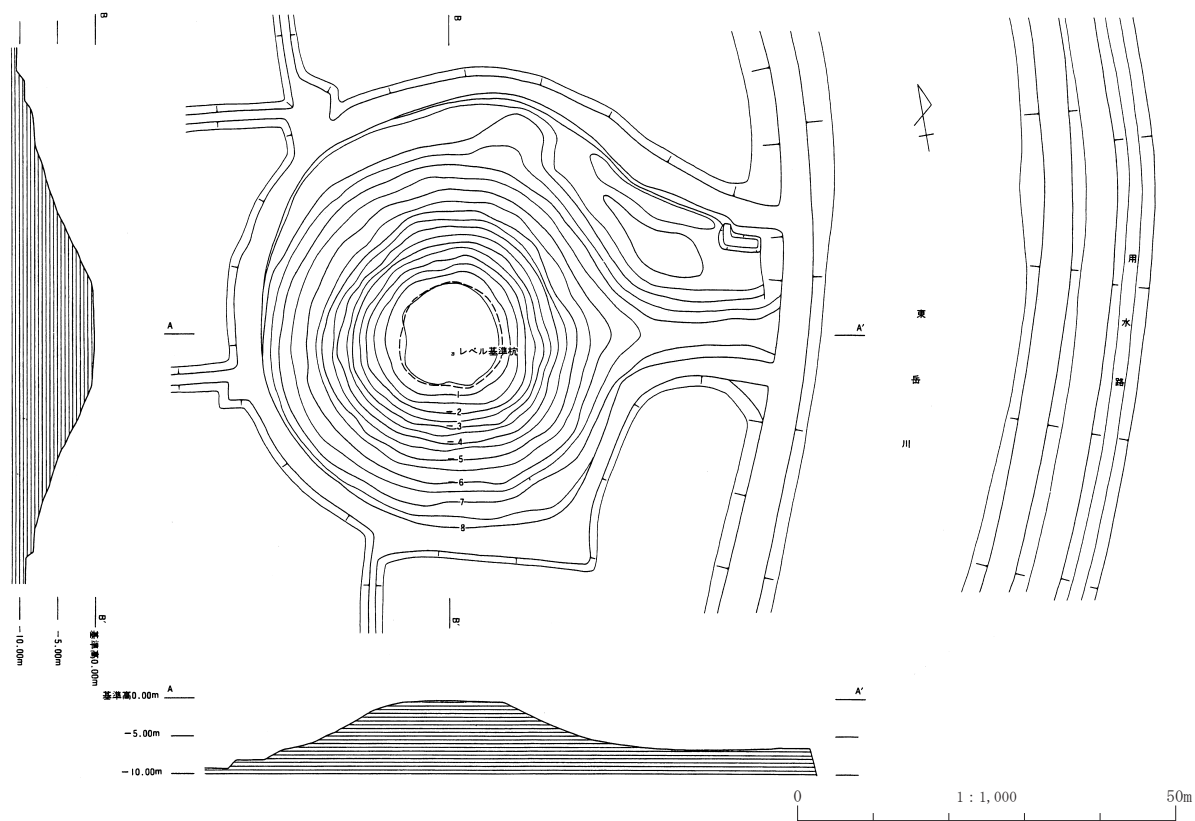


図 24 1994 熊大報告掲載の長目塚古墳墳丘測量図

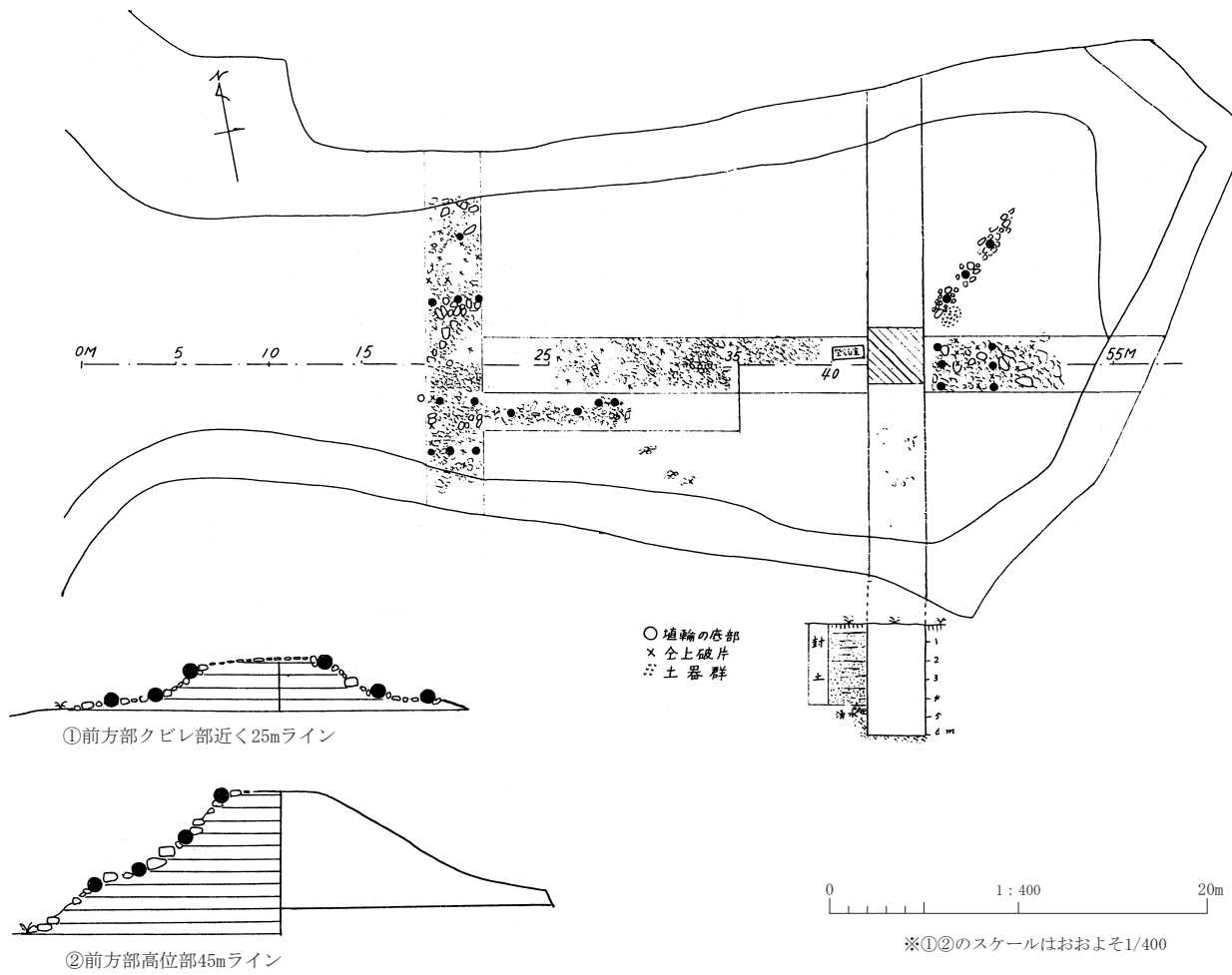


図25 長目塚古墳前方部の葺石・埴輪配列・土器出土位置および横断面図

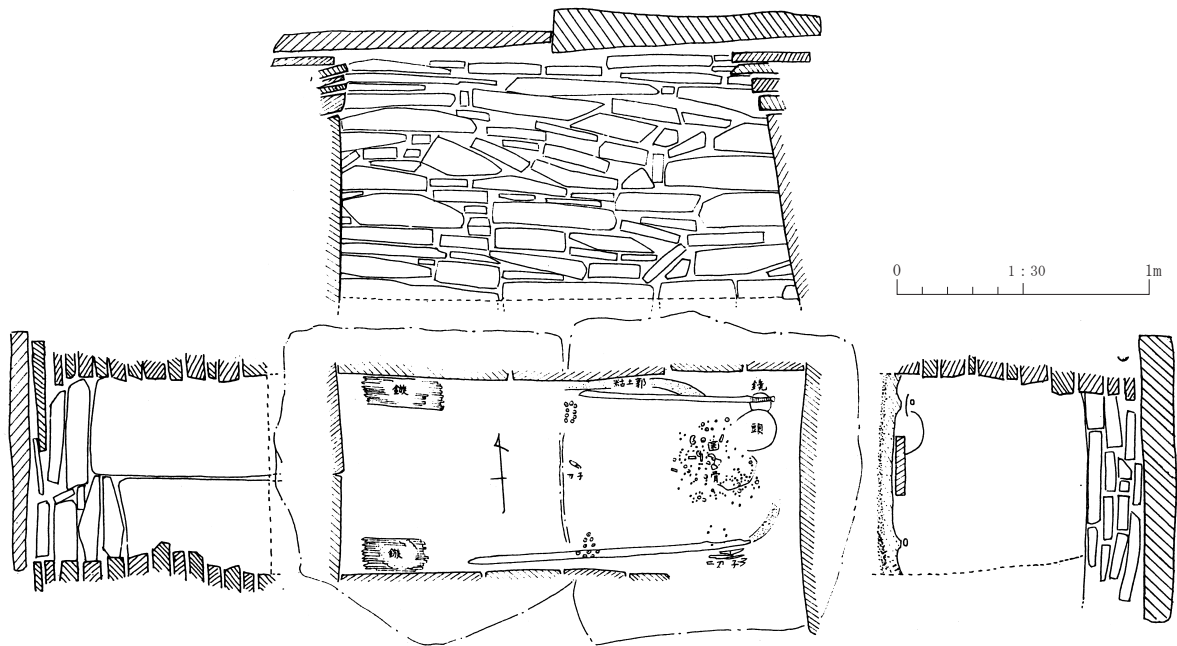


図26 長目塚古墳の前方部石室および遺物出土状況

たとする確証はないことが述べられている[同 p. 6]。残された墳丘測量図(図 23)をみれば、墳丘形態にそったかたちで土手状の外堤と幅の狭い溝がめぐっているように思われるが、現在の墳丘ではそのような構造部位を確認することは困難である。なお、盛土は古墳周囲の掘削土によるとされている。

前方部 発掘調査は河川改修によって消失する前方部に対してのみ行われた(図 23・25, 図版 6)。1962 報告では、前方部のクビレ部近くは 2 段、前方部の高位部(前端付近)は 4 段築成であったとされている。前方部の各段斜面には川原石を用いた葺石が施され(図版 7)、墳頂平坦面には幅 3.5m にわたって板状安山岩が平坦に敷かれていたという(図版 8)。埴輪列は、調査区西側の両側面では 3 段の列が、東端の高位部では 4 段の列が確認された。埴輪の樹立間隔は約 1m で、樹立においては深さ約 30cm の土坑が掘られ、根固め石数個が用いられていたらしい。ここで、若干の検討が必要なのは段築数である。前方部前端付近は 4 段築成であったとされているが、検出された埴輪底部の位置図(図 25 の上)や前方部横断面図(同下)をみると、どうも 2 段築成と考えた方がよいように思う。該当箇所が破壊されてしまったため確認するすべはないが、埴形が類似する古墳の調査事例を参考にするなどしながら、今後、検証する必要がある。

墳丘上の祭祀 前方部前端から北斜面にかけての位置で(図 25)、須恵器や土師器が数群となって埋められた状態で検出された。いずれの土器も埋める以前に故意に破砕された状態であったという。後述する前方部石室に近接していることから、前方部埋葬に関連する祭祀行為によるものとも考えられるが、埋葬に関係なく執り行われた墳丘上での祭祀の可能性も排除すべきではないだろう。

(2) 前方部石室の構造

構築位置 前方部前端付近の墳頂部ほぼ中央、墳丘主軸線より約 50cm 北に寄った位置に構築された石室である(図 25)。石室主軸は墳丘主軸に平行する。現地表下 50cm で天井石に達したという(図版 9-1)。前方部の「南方より掘開して壙を穿ち石室を構築し」と報告されたが[坂本 1962 : p. 14]、前方部の側面から墓壙を掘り進んだとされる点に疑問がある。墳頂部からの掘込墓壙とする方が蓋然性が大きいのではないだろうか。

なお、発掘調査の終了後、石室は、破壊から逃れた前方部に移築された。第 3 部第 1 章の緒方論文によれば、出土した人骨や歯も同時に埋め戻されたという。

天井石 石室の主軸方向はほぼ東西で、墳丘主軸に平行する(図 26)。天井石は東西に並んで 2 枚あり、いずれも板状安山岩である(図版 9-1)。東側の天井石は東西 1.2m、南北 1.27m の四角形で、下面は平滑に仕上げられ、厚さは西側の合わせ部付近が 18cm、東側が 8cm である。西側の天井石は五角形を呈し、東西 1.14m、南北 1.26m、厚さは西側が 7cm、東側が 5cm である。東西両天井石の合わせ面は密着するように仕上げられている。天井石の上には、厚さ約 5cm の赤土層があり、粘土被覆と報告されている。

壁体構造 従来この石室は竪穴式石室とされることが多いが、後述するように東西両小口壁の下半に立位の板石を設置している点を重視すれば、石棺系石室に分類される(図 26)。

石室の大きさは、長さ(東西) 1.85m、幅(南北) 85cm、高さ約 95cm である。

東小口壁は、幅 1m 余、高さ 75cm の板石 1 枚を立て置き、その上に板状安山岩が 4 段にわたって小口積みされる。西小口壁は、2 枚の板石が南北に並んで立てられる。それら板石の幅はいずれも 45cm 内外、高さは北側石材が 70 cm 余、南側が 60cm 余である。その上に板状安山岩が小口積みされている。両小口壁とも、その多くの面積を立位の板石が占めていることが特徴的である。

側壁は南北壁とも床面から板状安山岩が小口積みされている。ただし、1962 報告では、南側壁は「東端約五〇糎はきちんとした積石がなく、東壁との間に人の通れる空隙をつくっている」とされ、「副葬刀子群の一部が南壁の延長線より南のこの隙内にはみ出していることからすればこの空隙が単なる後次の破壊では

なく埋葬に関係があるかとも考えられる」と述べられている〔同 p. 12〕。しかし、天井石除去直後の写真（図版 9-2）をみれば、該当箇所（石室内）の壁体が崩れ、その壁体石材が石室内に落ち込んでいる様子がうかがえる。つまり、この写真を根拠にすれば、1962 報告で南側壁の空隙部とされた箇所には、本来、板石積みの壁体が存在したが、それが崩壊したため空隙状を呈していたにすぎないと判断される。1962 報告においても、別の頁では「石室内には流土がみち又南側壁東端部の粗雑な積石のくずれがあった」と記されていて〔同 p. 14〕、調査当時であっても壁体が崩れた可能性を考慮していたことを知ることができる。なお、1962 報告で指摘された副葬刀子群の空隙部へのはみ出しは、遺物出土状況を示した図 26 によるかぎりうかがうことはできない。

床面構造 石室の床面には、薄く敷かれた川砂の上に厚さ約 5cm の粘土が敷かれていると報告された。そして、この粘土は側壁にそってやや高くなり、その高まりは石室の東端付近で楕円形のカーブを描くとされ、粘土槨と称された〔同 pp. 12・14〕。しかし、図版 11 の床面写真や図 26 の断面図をみれば、粘土とされたものはたんに床面を構成する粘質土にすぎないとみなす方がよいように思う。

床面の中軸線上、東小口壁から約 20cm 離れた場所で、1 枚の板石が検出された。頭蓋骨の左側が乗ることから、この石材は石枕であると判断された。「丹に染まって赤い」と報告されている〔同 p. 12〕。

赤色顔料 1962 報告では、「石室内は床、側壁面には丹が塗布されて、赤い石室である。ことに人体の胸部上半は丹が濃ゆい」と報告された〔同 p. 12〕。丹と記されているが、石室壁面に塗布されていたのはベンガラであろう。なお、石室内出土遺物および埴輪に付着した赤色顔料については、第 3 部第 8 章の志賀論文で分析されているが、それによれば被葬者の上胸部付近出土の玉類に付着した顔料は水銀朱である。

（3）前方部石室の遺物出土状況

石室内（図 26） 床面東側の中軸線上に置かれた石枕を下にして、一体分の頭蓋骨が出土した（図版 11）。仰臥伸展葬であると報告されている。

その被葬者の首から上胸部の位置で、勾玉 4 点、管玉 5 点、ガラス丸玉 23 点、ガラス小玉 267 点、ガラス小玉破片 11 点が出土した。また、両手首の位置でガラス丸玉が左右それぞれ 10 点ずつ、糸を貫き連ねたような状態で出土した。首から上胸部付近出土の玉類は首飾り、両手首付近の玉類は手玉であろう。なお、玉類にはほかに滑石製白玉（1962 報告の碧玉小玉 26 点に相当）があるが、出土位置は明記されていない。しかし、ガラス小玉と同程度の大きさである点を考慮すると、首から上胸部付近の玉類と一括で取り上げられた可能性が高いのではないだろうか。

頭蓋骨のすぐ右側（北側）では、内行花文鏡 1 点が鏡面を上にして出土した。また、被葬者上半身の左右両側に沿う位置、すなわち石室の南北両側壁沿いでそれぞれ 1 点ずつ、計 2 点の鉄刀が出土した。北側壁沿いの鉄刀（図 32 の鉄刀 1）は把部を内行花文鏡の上に乗せ、切先を西に、刃部を北に向ける。鞘に納められた状態である。南側壁沿いの鉄刀（同鉄刀 2）も鞘に納められ、切先を西に、刃部を北に向けている。

南側壁沿い出土鉄刀の把部のすぐ南側で、刀子 7 点が切先を東に向けた状態で並んで出土した。また、床面のほぼ中央でも刀子 1 点が出土した。これについては切先方向が記されていないが、出土状況図（図 26）をみれば北西を向いていると思われる。なお、現在、刀身部で数えて 13 点の刀子が長目塚古墳出土のものとして残されており、この数は 1962 報告で示された 8 点よりも多い。そのため、注記がなされていないこともあって、南側壁沿い出土の 7 点と床面中央付近出土の 1 点が実際のどれであることを区別して提示することができない。ただし、13 点のいずれもが抜き身であることから、刀子はすべて抜き身状態で副葬されていたことはわかる。

被葬者下半身の左右両側、すなわち石室西側の南北両側壁沿いで、東の状態の鉄鏃が南北それぞれ一塊づ

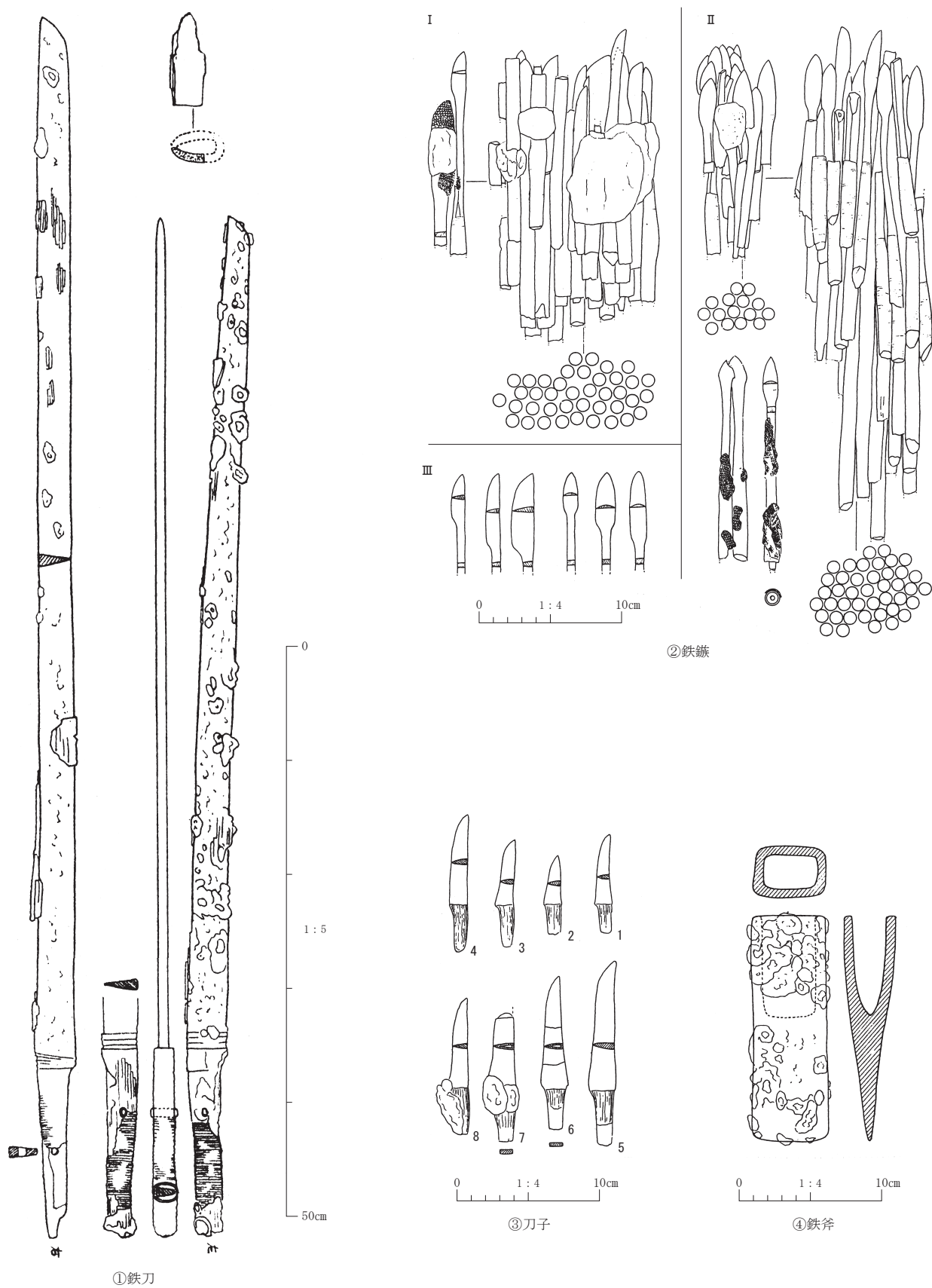


図 27 1962 報告掲載の前方部石室出土鉄刀・鉄鏃・刀子・鉄斧実測図

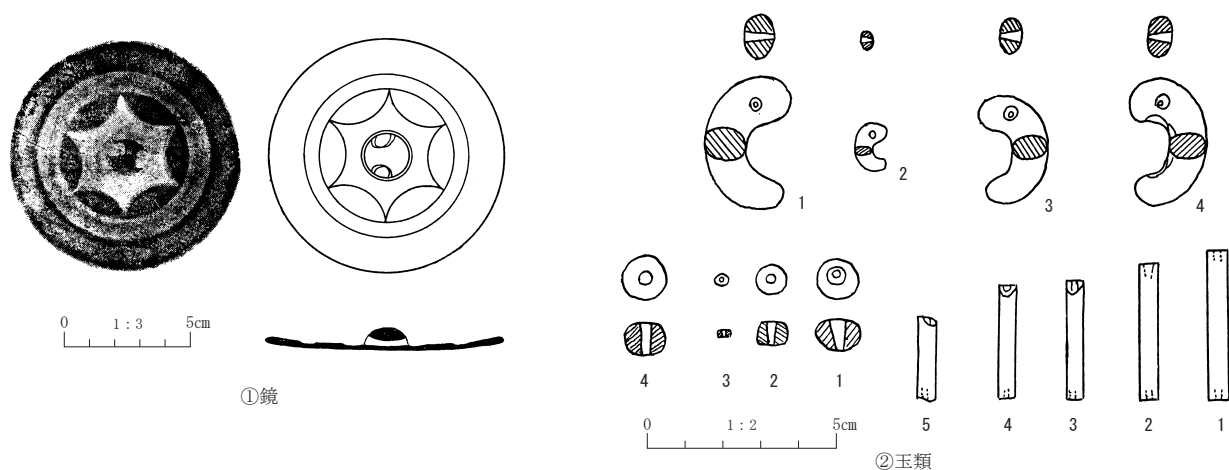


図28 1962 報告掲載の前方部石室出土鏡・玉類実測図

つ出土した。いずれも刃先を西に向ける。北側壁沿いの鉄鏃束（図35の鉄鏃2）はすべて長頸柳葉鏃、南側壁沿いの鉄鏃束（図34の鉄鏃1）はすべて短頸片刃鏃であり、副葬位置ごとに鉄鏃型式がそろえられている。どちらも、矢筒に納められていた可能性がある。

天井石上 東側天井石上の中央部で有袋鉄斧1点（図39）が出土した。袋部内に木質がみられないことから、柄に装着されていなかった可能性が考えられる。

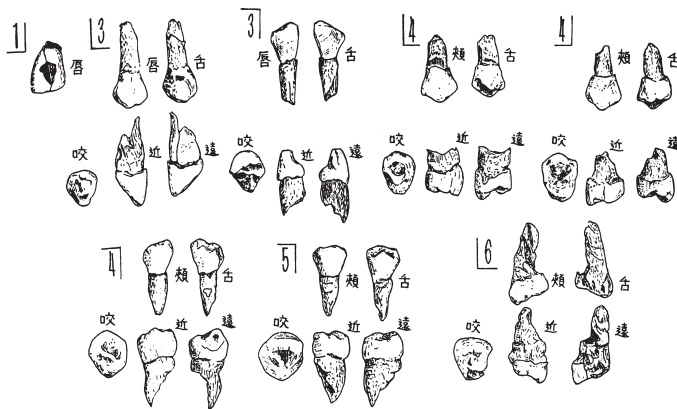


図29 前方部石室出土人歯実測図

（4）前方部石室の被葬者

石室内からは一体分の頭蓋骨が出土した。東枕で仰臥伸展葬である。1962年の報告に際して、この人骨のうち歯（図29）についての鑑定が行われ、推定年齢35歳くらいの女性であり、身長は低い方に属すと報告された〔柄原1962：p.37〕。

（5）前方部石室出土遺物の種類と数

石室内、天井石上に分けて前方部石室で検出された遺物の種類と数を以下に示す。さらに、現存数を括弧のなかに示す。

〈石室内〉

銅鏡	内行花文鏡	1（現存数1）
武器	鉄刀	2（現存数2）
	鉄鏃束	2（現存数2。現状の短頸片刃鏃は最小個体数39、長頸柳葉鏃束に含まれる鏃は最小個体数49、最大個体数50。ほかにこれら束から分離したと思われる鉄鏃片多数）
農工具	刀子	8（刀身部現存数13。ほかに茎部片1、刀子の可能性のある破片8）

玉類	勾玉	4 (現存数 3。所在不明はガラス製勾玉 1)
	管玉	5 (現存数 4)
	ガラス丸玉	43、うち 20 は手玉 (現存数 30)
	ガラス小玉	267 (現存数 157)
	ガラス小玉破片	11 (現存数 3)
	滑石製白玉 [1962 報告では碧玉小玉]	26 (現存数 20)

〈天井石上〉

農工具	鉄斧	1 (現存数 1)
-----	----	-----------

(6) 墳丘出土の須恵器・土師器・埴輪

須恵器、土師器、埴輪の出土位置については、墳丘の構造を述べるなかですでに記した。ここでは、1962 報告で示されたそれらの実測図を提示しておく (図 30・31)。これら実測図と現存資料との対応関係については、須恵器、土師器にかんしては第3章第2節の記述を参照していただきたいが、ここで若干の説明が必要なのは埴輪にかんしてである。

1962 報告では埴輪の全体形状の復元案がいくつか提示された。まず、図 31 上の図を使って、A、B、C I ～C III 類の復元案が示された。また、図 31 下の実測図を用いて D 類の存在が示唆された。D 類とは、図 31 下-1 の存在から二重口縁壺形埴輪を意図したものと思われる。この A ～ D 類が、のちの文献にもそのままのかたちで引用されている [森山 1983]。

さて、本書の第2部第3章第2節第3項で詳述されるが、今回の再整理作業の結果、大型円筒埴輪と単口縁壺形埴輪、二重口縁壺形埴輪の全体形状が復元された。また中型円筒埴輪の存在も確認された。これを 1962 報告の復元案に対応させれば、大型円筒埴輪が A 類に、単口縁壺形埴輪が C 類に、二重口縁壺形埴輪が D 類に相当する。つまり、B 類のみが確認できなかったことになる。では、なぜ 1962 報告では B 類のような形状が復元されたのであろうか。

B 類の特徴は、壺形であるにもかかわらず、その頸部に突帯を有し、また口縁部と肩部に円形の透かし孔が穿たれる点である。1962 報告ではこうした復元の根拠となった埴輪片は示されていないが、D 類復元の根拠とされた図 31 下の埴輪実測図のうち、2 および 4 が B 類の頸部から肩部の形態に酷似しているように思う。また B 類の口縁部形態は A 類のそれに近い。ここからは想像するしかないのだが、B 類復元の根拠には、図 31 下-2・4 の存在、および接合できない A 類口縁部の破片があったのではなかろうか。

この想像が正しいとすれば、図 31 下-2・4 で示された破片を検討すれば、B 類復元の妥当性が検証できることになる。さいわいなことに、図 31 下で示された 5 点のうち、2・4 に対応する破片のみ、今回の再整理作業で特定することができた。そしてそれらを検討すると、いずれの実測図も上下の判定を誤っていることが明らかとなった。2 は本書図 53-28、4 は図 49-12 の破片であり、前者は二重口縁壺形埴輪の口縁部、後者は大型円筒埴輪の胴部と判断された。また 4 に示されていた透かし孔も誤認であった。つまり、2・4 の 2 つの破片とも、B 類復元の根拠資料とはならないことが明確になったのである。さらに、再整理作業であつかったほかの埴輪片のなかにも、B 類の存在を示唆するようなものは存在しなかった。以上の検討の結果、B 類のような形状の壺形埴輪は存在しないと結論づけられる。

なお、図 31 上の C I 類の胴部下半には鍵手文状の線刻が描かれているが、同じ文様をもつ本書図 49-15 の破片は大型円筒埴輪の底部と判断されていることも付言しておく。

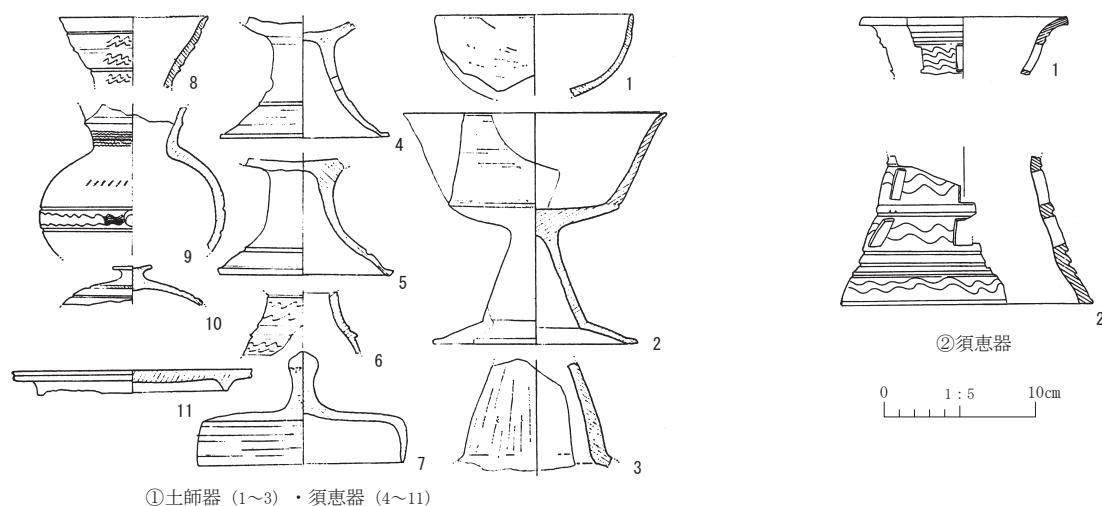


図30 1962 報告掲載の墳丘出土土器実測図

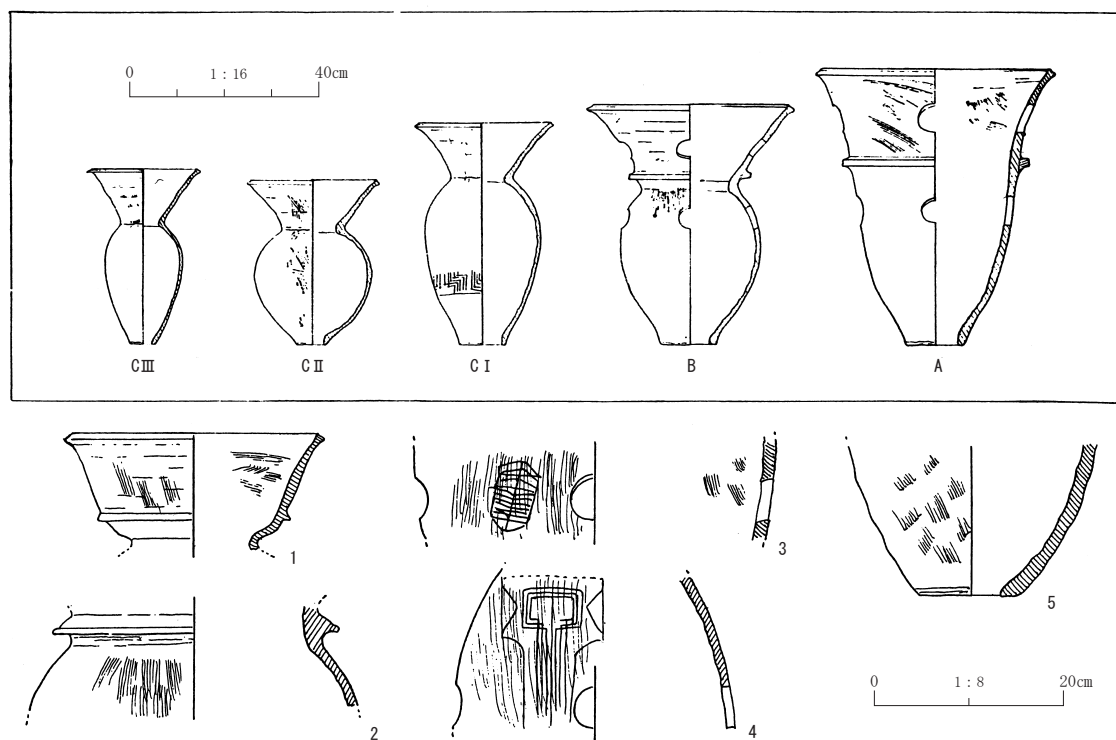


図31 1962 報告掲載の埴輪復元図・実測図

第2節 1989年の調査（熊本大学による測量調査）

第1章第2節のなかでも記したが、中通古墳群に分布するいくつかの古墳については、熊本大学文学部考古学研究室によっても測量調査が行われている。調査実施のきっかけは、『前方後円墳集成』作成への協力を求められたことだという。調査は1989年9～10月に実施され、その成果は1994年に『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集のなかにまとめられた〔岩崎・山下編1994、以下では1994熊大報告と記述〕。この報告をもとに、以下では、当時の長目塚古墳の様相についてまとめておく。

測量は後円部墳頂を0mとし、そこからレベルを下げていく方法で行われた〔図24〕。残存する墳丘部分に

かぎって測量されたようで、周辺の水田はほとんど表されていない。また、1962 報告では「長目塚の長い前方部の先端部は改修された東岳川右岸堤防下に残された」[坂本 1962 : p. 32] とされているから、本来なら東岳川東側の堤防およびその周辺までを測量して前方部長の検証などに備えるべきであったが、それもなされていない。そうした若干の不備があるが、この測量図は 1989 年当時の長目塚古墳の墳丘を知るうえで貴重である。

さて、1994 熊大報告では、墳丘の主軸方向は N108° W、墳丘の残存長は約 68m、後円部径は 56.4m、その高さは 9.2m、後円部墳頂平坦面は東西 13.2m、南北 13.8m のいびつな円形であると報告された。また、後円部北西斜面の等高線に乱れがみられることから、この部分の墳丘が崩壊していると指摘された。段築にかんしては、－5.5m および－7.0m のあたりで斜面傾斜が変わることから 3 段築成の可能性を考慮しつつも、結論では「後円部 2 段築成で径 62.4m」に復元されると記された[岩崎・山下編 1994 : p. 8]。

さらに、1962 報告の測量図[図 23]と比較しながら、外堤とされた土手状の高まりのうち後円部北西側にあったものは失われていること、しかしクビレ部の北側にはわずかに周溝と外堤の名残がみられることが指摘された。ほかに、後円部北側において－7.5～－8.5m の等高線が大きく外側に張り出しており、これは以前の測量図には認められないことから、この部分にその後の改変が加えられていると報告された。

1989 年の測量当時、長目塚古墳の墳丘には杉が植林されていた。そのうっそうとした姿は遠くからでもよく目立つ存在であったという。しかし今はすべての樹木が伐採され、長目塚古墳はその墳丘面を太陽のもとにさらしている(図版 14-2)。

(杉井 健)

第2部第2章 引用・参考文献

岩崎充宏・山下志保編 1994 「中通古墳群」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-47

坂本経堯 1962 「阿蘇長目塚 附小嵐山古墳」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 1-40

栃原義人 1962 「長目塚古墳前方部堅穴石室の人歯に就いて」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 33-38

森山栄一 1983 「長目塚古墳の埴輪」『肥後考古』第4号、肥後考古学会：pp. 135-150

第2部第2章 挿図出典

図 23・25～28・30・31：坂本 1962

図 24：岩崎・山下編 1994

図 29：栃原 1962